

石川県の伝統工芸の歴史

石川県には、陶芸、染織、漆器、金工、木工など、伝統的な工芸品がある。

石川県の工芸は、江戸時代（1603-1867）に加賀藩主によって、急速に進化し洗練されたものになった。加賀藩主・前田家は、豊かな米作によって巨万の富を築き、その財を文化に注いだ。もともと鎧や武具の整備・修理を行うためにつくられた工房は、70 人もの職人が技を磨き、後継者を育成し、前田家のために華麗な作品を共同制作する多分野の工芸館に変わった。また、全国の腕利きの職人を金沢に招き、土地の提供や多額の資金援助も行った。加賀友禅、加賀時絵、加賀象嵌など、石川県の代表的な工芸品は、この時期に生まれた。

一方、進取の気性に富む商人たちは、沿岸の交易船を使って加賀産物を藩の外にまで広く送り出し始めた。北海道と大阪を結ぶ船は、さまざまな港に停泊して、加賀藩の特産品を運んだ。肥料や米などの生活必需品に加え、漆器などの高級品も運ばれていた。こうした交易と、前田家の政治的な贈答品としての工芸品によって、石川県の伝統工芸はその品質と美しさで広く知られるようになり、現在に至っている。